

---

# 覇道を進みし勇者の世界救済

GeNSO\_

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

覇道を進みし勇者の世界救済

### 【Nコード】

N68460

### 【作者名】

GENSO

### 【あらすじ】

穴に落ちたと思ったたら落ちた先はなんと異世界！？しかも「世界を救ってくれ」だど？いやいやいや無理だから、つかダルいしね  
ただの高校生だった春原 彰人<sup>すのはり</sup><sup>あきと</sup>が世界を救う！？そんな感じの物語

## プロローグ（前書き）

小説初投稿ですがよろしく願います

誤字、脱字ありましたらご報告お願いいたします

## ブローグ

>盟約を誓いし魂よ、古の契約に従い我の下へ顕現せよ!!!<

「ん？（気のせい………なのか？今、人の声がしたような気が……）」

「ま、俺には別に関係無いか（なんか、呼ばれてるような気がしたけど、気にしないでいいか）………って、あれ？え！ちよ！？ウソォ！！地面がなくなっている上になんか吸い込まれてるんだけどおお！！！」

ああ、死んだな。きっと死んだよ……だって吸い込まれてるもん生きて帰れないよ多分………ん？待てよ？………これって悟りじゃね？……死ぬ寸前に悟りを開くなんて……俺ってスゲエ……

「って、あれ？死んでない……みただけど、ここ何処だ？」

まあどこだっていいけどさ、死ぬと思ってたのに生きてたんだ、それだけで儲けもんだろうしな

ってか目の前に人いるじゃん全然気付かなかたよ……

すっげえしかもかなりの美少女。こんな娘、リアルに存在したんだな  
マンガとかゲームだけだと思ってても「あなたが勇者さまですね!？」  
てかこれは本当に現実なのか?もしかしたら死後n……て

「は?」

何言っちゃてんのこの娘、もしかして電波さんか?  
電波さんなのか!?

そんなこんなで春原 彰人 職業:高校生の世界救済が始まろうと  
している……はず

## プロローグ（後書き）

かなり短めですがプロローグってことでおおめに見てください

## 第一話 勇者様参上！（前書き）

1ヶ月ぶりの更新です

遅くなつてすみませんでしたm（  
|  
|  
）m

## 第一話 勇者様参上！

「あなたが勇者様ですね！？」

「は？」

目の前にすごい美人の電波さんがいた。  
つとここまでが前回の展開だ！

……はあ…これは夢だ夢に違いはない……！

っと思っていたが現実逃避はここら辺にしておいて…少し落ち着いて状況確認したほうがいいな

「あの…勇者様？」

とりあえずココは何処なんだ？

穴から室内に落ちたってことは真下…？

いや、常識的に考えてそれは無いな

カーテンで外は分からないが窓らしき物が有るし

いや、コレだけ電波なんだ…もしかしたらホントに地下に窓をつけたのかもしれない

「勇者様ってば…！」



……うるさいなあ。

こっちは状況確認で忙しいんだよ！

電波は無視して

確認の続きだ。

とりあえず窓から外を見てみよう

ここが地上であることを願いなが「いい加減に返事しなさい！！  
アホ勇者！！」

「おつ普通に地上じゃん。ちょっと安心」

「無視するな〜！！！！」

マジでうるさい

まあいいここが地上なのは分かったが外の風景が明らかに日本じゃないんだが……どっちゃかって言う中世のヨーロッパって感じじゃん……なんかあれ……RPG的な感じがするんだけど  
一応確認できるコトはし終わったけど……無いわぁ……

「うつ……ひつく……無視……しないでよぉ……」

え……？なんかあの娘泣いてない！？

「ちょっ！おい、泣くなよ！もう無視しないからさ！」

「ホントに……？」

「ホントだよ だからもう泣くなって、つかお前さっきとキャラ違いすぎじゃね？」

「そんなこと……グスツ……無いわよ……バカ勇者……」

「つかそもそもさ……その勇者って何なのさ？」

いきなり連れてこられて『貴方が勇者様ですね！？』

とか言われても困るし、てかコレ拉致だし……犯罪だし

「アンタ、勇者は勇者よ

あの、魔王を倒す勇者様」

「あつやっぱりそうなのか

なんかお約束って感じ」

「なに？アンタの世界じゃ召喚されるのってよく有ることなの？」

「いや、オレの世界でっていうよりもオレの世界にある物語の定番  
て感じ

つか、『アンタの世界』ってことはやっぱりここはオレのいた世界  
とは別モンな訳？」

「なるほどね……多分その通りね、一応《異世界から勇者を探しまし  
よう》って呪文だったから」

「が気に食わないけど代替は理解したよ………んで、オレはこれ  
からどーすれば良いんだ？」

「私は異常なほど落ち着いてるアンタが気に食わないわ………一応  
これから国王に会ってもらうことになってるわ」

「一応って………」

まあいいや。ならその国王様とやらの会いに行きますか……！」

「……………アンタやつぱり落ち着きすぎじゃない？」

「知るかよそーゆう性格なんだから仕方ないだろ？  
つか行くぞ…えっと……………」

「イリア・F・エールライトよ」

「長いな…オレは春原 彰人だ…よろしく」

ふう。悪いヤツじゃ無いみたいだしこれから仲良くやっていけそう  
かな……………？

## 第一話 勇者様参上！（後書き）

コレからは週一更新を目指します

**第二話 あれ?.....月って黄色だよね? (前書き)**

目標を達成出来なかった

無念(っ  
(

## 第二話 あれ？……月って黄色だよな？

「そんじゃ早速国王様とやらに会いに行くか」

「そうね、じゃあ行きましょうか」

「ああ、道案内よろしくな」

「あつ！そうそう、移動しながらで悪いけどこの国っていつかこの世界について軽く説明しくわね」

それは助かるな、オレはこの国いや世界か？について何も剃らないからな

「頼むよオレも色々と知っておく必要があるだろうからな」

「まずはこの世界についてね、まあこの世界っていつでも別に名前はないんだけどね、あんたの世界もそんな感じでしょ？」

「そうだな…国とかには名前有るけど世界とかにはこれといって無いな後は星とかにも名前ついてるけど……月とか……」  
あつ月は惑星か

「あつ月ならここの世界にもあるわよ」

「へえやつぱ黄色くて真ん丸なの？」

「何言ってるのよ、月はサファイアブルーでしょ……ってそうか、世界が違ってから月の色も違うんだ……」

「そうみたいだな……てことはお互いに同じ言葉でも意味合いとかが違う可能性があるわけだ」

てかサファイアブルーの月とか………気色悪くね？

「そうね………とりあえずそれは置いて話を戻しましょう  
世界の説明の続きだけど、この世界に名前はないそしてこの世界は今、人間と魔族が争いを起こしている」

「なるほど……つまりその争いを終わらせる為にオレに魔王を倒して欲しいわけだ」

………ダッル！

「そーゆーこと

んで次にこの国についての説明………って説明する前に着いちゃった……」

結構脱線したからなあ………

「じゃあ続きはまた後で聞くから先に国王様の挨拶しにいこうぜ」

「そうね、行きましようか

国王様、イリアです勇者を連れて参りました」

・  
・  
・

「入れ」

………反応おっそー！

「なにボツーっとしてんの、行くわよ」

「おっおっ  
」

「失礼します  
」



第二話 あれ？……月って黄色だよね？（後書き）

次こそは！

次こそは！！

第三話 国王って皆あんなに話し出すの遅いのか……？（前書き）

どうもすみませんでしたm（――）m

### 第三話 国王って皆あんなに話し出すの遅いのか……？

「失礼します」

おお！なんかメチャクチャ広いぞこの部屋  
それになんだかすごい高そうな壺とか像があるし……売ったら一体  
どの位するんだろう？

「ちょっと！あんまりキョロキョロしないでよ」

「おつ悪い悪い普段こんな高そうなモン見る機会が無いもんだから  
さ」

自分で思っている以上にガン見てたみたいだな

「そう、まあ無駄に高いものばかりだしね」

・  
・  
・

「……なあ、一体いつになったら始まるん」「よく来たな、異界に住  
む勇者よ」「つうお！」

いきなり喋んなよ、ビックリすんなあ

「いえいえ、そもそも自分の意思で来んじゃ無いんで」  
穴に落ちて気付いたら此処でしたから

「なに皮肉言ってるのよ  
国王様に失礼でしょ」

「構わん

勝手に呼び出して悪かったのだが、こちらも緊急事態だったのだ」

「ほう、では>私<をこの王室に招いたということは  
その緊急事態についての説明してくれるとって言いのかな？」

「うむ、そのつもりだ

では、エレナよ説明を頼む」

「え、私がするんですか？」

「当たり前であろう」

「……だる………では、今のフィラス王国………というよりこの世界の状態と言った方がいいですね

この世界は今、カムイ魔王率いる魔族達の攻撃を受けています」

「魔族の侵略か……それは最近からなのか？」

てかアイツ説明始める前にだるって言ったぞ

良いのかそれで？」

「いえ、魔族からの攻撃は古くから続いています  
ですが問題は……」

「『カムイ』魔王か……」

「ええカムイ魔王は今までの魔王の中でも最強と言っても過言ではないでしょう

そして何よりカムイ魔王はとても好戦的なのですなんせ前魔王であるミカエルを倒し魔王の座を奪ったのですから」

「なるほど、その好戦的なカムイの指示で魔族の攻撃が激化した……と」

割とゲームとかにありそうな話だな

「その通りです

そして激化した魔族の攻撃の影響で他国との貿易も満足に行えず……」

「いつまでもこのままにいる訳にもいかなから現状を打破し現魔王であるカムイを葬れる可能性を持つ勇者を召喚するために《異世界から勇者を探しましょう》を使って、私くを呼んだのだな？」

「その通りだ

勇者は「彰人だ」……アキトは中々賢いな

………それでどうだ？」

どうだったのは

「『勇者として魔王を倒し、この国……いや世界を救ってくれるか？』ということか？」

「そうだ」

「いいだろう、ただし条件がある」

「ほう、条件とは？」

「なに、簡単なことだ

ただ私の覇道の邪魔をしないということだ」

「覇道だと？」

「そう武力により統治を行い頂点に立つための道」

「まあ…良いであろう」

だが何故そのようなことを条件にだした？」

「愚問だな…」

それはオレ>私くが『霸王』だからだよ」

**第三話 国王って皆あんなに話し出すの遅いのか……？（後書き）**

今回は伏線を作りました！

第四話 うわぁ……やっちゃったよ……（前書き）

ノルマクリア

キタ（。。。）！！



第四話 うわぁ… やっちゃったよ……

・ ・ ・

やっちゃたよ

あのことは誰にも言わないことにしてたんだけどなぁ……異世界に呼ばれて無意識の内に気が緩んでいたのか？

それになんだか元の世界で『霸王』になっってからずっと感じていた違和感がこつちに来てから無くなってるし  
もしかして何か関係あるのか？

……つて考え込んでも答えはでないよな

まあいいさオレ 霸王つてことは紛れもない真実なんだ  
それならオレは

「霸王として己の覇道を突き進むだけさ」

「ねえ、その霸王つて一体何なの？」

よし！世界が変わったからつてオレ自身の生き方を変える必要は無いからな

つてかむしろこつちの世界のほうが霸王としては進みやすいような気がするしな

けど取り敢えずは国王との挨拶も済んだし、呼ばれか理由もハッキリしたし……

寝たいな

つて考え込んじゃったな

これからどうするのかイ……電波さんに確認しなくちゃな  
「なあ電波さん、オレはこれからどうすればいい……って」  
あの娘なんで泣いてんの!?

……！もしかしてアレか？

オレに話かけてたのにオレは考えこんでたから聞こえなくて  
それを無視されてると勘違いして泣き出したとか？

「……つぐす……」

つたく

どんだけ寂しがりやなんだよ

「泣くなつて、悪かったよちょっと考え込んで聞こえてなかつただけだから  
別に無視してたんじゃないんだって」

「……ホント？」

「ホントだよ」

なんかすつげえデジャブ

つか電波さんのキャラ安定しねえ

「よかった、嫌われたのかと思っちゃった……つずず」

うつ……ちょっと可愛いじゃねえか、くそっ

「そんなことねえよ、安心しな」

「うん、ありがとう」

「よし、落ち着いたみたいだし改めて聞くけど  
オレはこれからどうすればいいんだ？」

「あつうん…一応今日出来るやつておきたいことはもう無いから用意した部屋で休んでもらって構わないわよ」

「明日もなんかあるのか？」

「うん、魔法関係のこと調べたり、武器関係のこととかね  
でもちよつと準備に手間取っちゃてて……」

「そつか、それなら仕様がないな  
それじゃあ今日はもう寝るかな……部屋に案内してくれるか？」

「ええもちろん、こつちよ」

・  
・  
・

「……」

「案内ありがとな、それじゃ、おやすみ……電波さん」

「おやすみなさい……………ってだらが電波さんよ  
……………  
ちよつと！ドアを開けなさい……」

「五月蠅いなあ、文句なら明日聞いてやるよ」

「もっつ！覚えてなさい……」

行ったか

名前忘れたなんて言えないもんなあ

また泣き出しそうだな

まあいいや

取り敢えず今日はもう寝よう、色々あって疲れたしな

………あつ、電波さんの名前思い出した

そーいやイリアって言ってたな……

いや、でも電波さんのままでいいかその方が反応面白いし

第四話 うわぁ… やっちゃったよ… (後書き)

ノルマクリアした自分にちょっと感動しました

第五話 電波さん……やべえ（前書き）

ごめんなさい m ( — — ) m

## 第五話 電波さん……やべえ

ふぁ……………ねむっ

今って何時くらいなんだ？

そもそも時間って概念有んのかな…？

無かったら待ち合わせとかだるいだろうなあ

《明日、太陽が天辺に来た頃にここで待ち合わせね？》

みたいな感じが……？

後で電波さんに聞いてみよ

・  
・  
・  
・

……………で、もう小一時間電波さん待ちしてるんだが……  
「何時になったら来るんだ…あの電波」

バンッ

「電波じゃ無いって言うてるでしょー!!」

「おお！電波さんおはよう」

「だからあ！電波さんじゃないって言うてるじゃない!」

「え？さんじゃなくてちゃんの方がよかった？」

「うゝそういう問題じゃないのゝ!」

あつ涙目やべえよ

メチャクチャ可愛いんですけど

まさかオレ、電波さんに惚れた……？

いやないない

だって、電波さんだぞ？

『電波さん』だぞ？

あり得ねえだろ？あり得ねえよ

絶対にねえよ「ねえ、どうしたの？私の話聞いてる？」

うわぁどうしよう……また電波さん泣いちゃってるよ

可愛すぎるだろ……！

「悪い悪いちよつと考えことしてた」

「もう！ちゃんと聞いてよね！

だからね、私は電波じゃ無いって言うてるの！分かった！？」

それは無い、絶対にない

「ああ、はいはい分かりましたよ」

「……………もうっホントに分かってるの？」

「全然？」

「う~~~~！！」

涙目で唸ってる

可愛い・楽しい・止められない!!続ける

OK決まりだ！

「で、何の話だったっけ？」

「だからね、私は電波なんかじゃな」あっゴメン聞いてなかった」

……………！！」



あれ？反応無し

「おいどうした？」

「うう……………ぐす」

完全に泣いちゃったよ

「悪かったよ

今度はちゃんと話聞くからさ」

「ぐすっもう……………いいもん……………もう話さないもん」

やべっ拗ねちゃったよ

でも…なんかいい……………な

「悪かったって真面目に聞くからさ……………機嫌直してくれよ……………な？」

「むゝ」

「ゴメンな？」

「許してあげる

特別だよ……………」

助かったあ

「ありがとう

そんで、なんだっけ？」

「そうだ！！

忘れるとこだった！

今すぐ広場に行くわよ！」

はあ？

「何しに行くんだよ？」

「魔法資質を調べんのよ！」

「魔法資質？」

なんだそりゃ……？

第五話 電波さん……やべえ（後書き）

次回はすぐ投稿出来るよう頑張ります

第六話 あっ忘れてた……！（前書き）

駄文サーセン

## 第六話 あっ忘れてた……！

「魔法資質つてのは簡単に言つとあなたにどれくらい魔法の才能が有るのかつてことよ」

なるほど……つまり

「魔法が使えるのか調べるってことか」

「まあ、そんな感じね」

「だるい。パス」

なんか疲れたからもう寝たいし……

「ちよつ！何言つてんのよ  
もう皆待つてんだから」

「ええ……ダルい」

「アナタのせいで遅くなつたんだから急ぎなさいよ」

「いやいや、あれはら絶対にアンタのせいだから！」  
オレも悪かつたけどさ……言わないけど

「ほら！行くわよ」

「はいはい」

わかつたから、行くぞ」

「あつちよつと待つてよ！

アナタ場所分かんのか？」

そりゃあ

「分かるよ

昨日部屋に行く途中にあつたじゃん」

「うつ…確かにそうんだけど……気付いてなかったかも知れないじゃん！」

「オレの観察眼舐めんなよ」

と、言いつつ先に行くオレまる

「あつ！一寸待ちなさいよ！！」

「嫌だ」

・ ・ ・ ・

着いた

「つか広すぎ

もう電波見えないじゃん」

「やっと来ましたか……（遅せーんだよアホ勇者）」

あ…エレナさんだ

つか…今なんか凄い罵声を言われた気が……

「すみません、アイツが五月蠅くて」

「イリア様ですか……（じゃじゃ馬娘の分際で……！だいたい私はこの仕事自体嫌n……）」

あ……あれ？

「あ、あのエレナさん……？」

「ハッ……！すいません取り乱してしまつて  
あつ眩きが消えた

「いえ、オレの方こそすみませんでした  
変なこと言っちゃったみたいで……」  
エレナさん恐れ

「アキトさんは悪くありませんよ  
ちよとじゃ」……イリア様のお転婆に疲れてるだけです」

あつ今じゃじゃ馬つて言いかけた  
「なるほど」

「つと、この続きはまた後程  
本題に入りましょう」

まだ続くのか……？

「あっはい」

『まつ待つてよ』

あつ電波の声

「魔力資質を調べる方法は二種類有ります」

あ

「一つは能力の高い法術師に見て貰う

二つ目は魔力を貴方に流し込むというもの

一つ目は今回は無理なので二つ目でやらせて貰います」

そーいや

「オレ魔法使えるや」

「はっ？」

「スミマセン

忘れてました」

あっダルそうな顔

「まあ良いです属性は？」

「あっー応風です」

アレは言わないでおいた方がいいよな

「じゃあ実際に見せてください  
それで良いです」

なんかエレナさん怖いです

「は……はい

じゃあやりますね」

……ふう

《 いけ 》

ビュンッ



まあただの風だけだね  
ってあれ…？

アソコにいるのって……

「電波だ」

「電波じゃない！！！！」

あっ怒りながら翔んでった

た〜まや〜

第六話 あっ忘れてた……！（後書き）

頑張ります！！

## 人物紹介（前書き）

今回は人物紹介のみです

## 人物紹介

春原 彰人 Sunohara Akitō

・性格 冷静 ドS（多分） / やる気少なめ

・年齢 16

・一人称 オレ

・好きなもの 猫 / 平穩 / チェス / カワイイもの

・嫌いなもの 話を聞かない奴 / 猫嫌い / 酸っぱいもの

普通に高校生をしていたはずがいきなり勇者として召喚されてしまった面倒臭がりの主人公

## Royal Road mode

・性格 冷徹

・一人称 我

・好きなもの 猫 / 戦闘 / 霸道

・嫌いなもの 霸道を妨げるもの

あること（本編でいつか明かされる……はず）を切っ掛けに目覚めた霸王としての状態

イリア・F・エールライト Ilia・F・Yelllight

・性格 感情豊か 電波

・年齢 15

・一人称 私

・好きなもの 動物 / 物分りのいい人 / 甘いもの

・嫌いなもの カワイイもの嫌い / うるさい人 / 辛いもの

電波な国王の一人娘。アイリさんと彰人に電波、じゃじゃ馬と言われるのを気にしている

エレナ・A・トリア Elena・A・Thoria

・性格 クール

・年齢 22

・一人称 私>ワタクシ<

・好きなもの 休み、昼寝、さぼり

・嫌いなもの 仕事

面倒臭がりな国王の秘書。

彰人と気が合うようだ

カリス・M・エールライト

Caris・M・Yelling

t

・性格 のんびり

・年齢 56

・一人称 我

・好きなもの イリア、お風呂

・嫌いなもの イリアの嫌いなもの

国王。おそらくもうほとんど出番は無いだろう

## 人物紹介（後書き）

この他に気になる点がありましたら感想などに書いて頂けると自分も返答が出来ると思います

P・S・キャラ名に一部ミスがありました

アイリ エレナ

でした

大変申し訳有りませんでしたm(\_\_\_\_\_)m

ユニーク1000記念『イリアのバレンタイン!』〈前編〉(前書き)

後半がもう意味不ですw

ユニーク1000記念『イリアのバレンタイン!』〈前編〉

【ILIA Side】

「ばれん……たい……ん？」

「ああ、コッチにはバレンタインの習慣がないのか……」

「うゝ何よ！勝ち誇った顔しちゃってさ！

そっちの世界の文化なんて私が知ってるわけないじゃない！

「それで！一体！どんなモノなの！」

「ん？ああ、簡単に言うと 決まった日に好きな異性にお菓子を渡して好きですって言う行事 だよ

あつ因にお菓子ってのは基本的にチヨコでさらに仲の良い異性に対しての義理チヨコってのもある」

「へ〜」

……って私にその話をするってことは  
もしかして……

「欲しいの……？チヨコ」

「なっ……んんんな分けないだろ……！  
このアホ電波！」

なっ

「電波じゃないってば〜！……ってどこ行くのよ……！  
アキト！」

ああ行っちゃった……



全くアキトは素直じゃないわねえ

まあいいわ！アキトのために最ッ高のチョコレートを作っ  
てあげようじゃないの……！！

もっもちろん義理よ！義理！！

……でもチョコって………どうやって作るのかしら……？

まあいいや。

とりあえず厨房に行きましょう！

先ずはそれからよ！

・  
・  
・  
・

「ひ……姫様！！お待ちください！

国王から厨房には姫様を入れないようにとの命が……！！」

「五月蠅いわね！

良いから出て行きなさい！許可なら後で取るわよ」

ギギイツバタンツ！

「な……！お待ちください！

姫様！姫様待つてください！いやマジで……！！

本当にヤバイから！姫様……！！」

「ふう……全く五月蠅かったわ」

よし！じゃあ早速作りましょう……！！

なんか丁度お菓子作る用意見たいのされてるし

本まであるし

・  
・  
・  
・

A『おい！どうする？姫様が厨房に入っちまったぞ』

B『くそっ！このままじゃ>電波な地獄くが再来するぞ！！』

C『今回の被害者は誰なのかしら？』

B『やはり国王様じゃないのか？』

A『いいえ、おそらく今回の被害者は

……アキト様だ』

C『勇者様ね…なるほど

確かに今回の件は勇者様が原因でしょうからね』

B『まさか「チョコケーキ（バター多め）が食べたい」なんて言い出すとは…』

A『きつと俺達に言う前に姫様に話したんだろうな』

ドッカーン！！

『『『ああ！！もうおしまいだ（よ）！！！！』』』

・  
・  
・  
・

「あら？また鍋が勝手に爆発しちゃった  
どうしてだろう？」

まあいいわ後で三人には謝っておきましょう  
仕様がなからまた初めから作りましょう！

よし！頑張るわよ！

「えっと…まずは>チョコレートを小さく刻みますくつと」

ドンツドゴツバキッ

よしっ！

「次は…>ボウルに刻んだチョコレートを入れ、そこに沸騰させた生クリームを少しずつ加えながら、泡だて器で混ぜていきます。溶けにくい場合は、45のお湯で湯せんにかけてながらも、混ぜていきましよう<………まあなんとかなるでしょう！」

びちゃ、べちよつぐちやつ

なんか飛散っちゃった…

「よし次！>チョコと生クリームがすっかり混ぜ合わさった後、グランマルニエ（リキュール）を加えてさらに、混ぜ合わせます。<…ね

お酒だけじゃつまらないいろいろ入れちゃいましょう  
きつとその方がおいしいわ！」

ボコツブクゴポッ

「もう少しで完成ね>バットにラップを敷いておき、そこに生クリームとグランマルニエ（リキュール）が混ざり合ったチョコレートを流し込み、で2〜3時間くらい冷やして固めます。<か  
よし！魔法で一氣にやつちやいましょう  
えいっ！」

カキンッ

・ ・ ・  
A『なあ、さつきから明らかに料理で発せられるはずのない音がしてるんだが』

B『いや？俺には全然聞こえないけど？ハッハッハッ』

C『ちよつとボランしっかりしなさい！現実を見るのよ！！』

『おいおいチエルシー俺はなんともないぞ？』

A『チエルシー、もうボランを休ませてやれ  
疲れてるんだよ』

『でもアラン……！』

・ ・ ・

まあなんとかなりそうね

「最後は……>バットから出し、好きな形・大きさに切り分け、コアをまぶして出来上がりです。

<か勿論オリジナルの形よね、やっぱり」

「完成〜！」

よし、後とはコレをアキトに渡すだけね

ギギッ

『『『姫様……！』』』

「なっ何よそんなに慌てて」

『厨房は？厨房は無事ですか！？』

あつ謝っておかなきゃ

「ゴメンナサイ鍋を13個爆発させちゃったわ  
あ、あと汚しちゃったかも…」

『なっ！』

『う……嘘だろ！？』

『姫様が鍋を壊しただけ？』

「何よその言い方！」

『『あつすみませんでした』』』

「まあいいや

今は忙しいからお説教はまた今度ネ！」  
早くアキトに渡しに行きましょう

「アキト様なら中庭ですよ」

「そうなんだ

ありがとうチエルシー」

・  
・  
・  
・

あついた！

「アキト……させませんよ……じゃじゃ馬娘……！」

えっ？

「エ……エレナ……？」

どうして貴女が……！」

「じゃじゃ馬、それを彼に渡すことだけは絶対に許さない」

なっ

「どう……して……？」

私はただ彼にチヨコを……！」

「ただのチヨコなら構いません  
でもそれは貴女の手作りでしょう？」

「何よ！まるでそれじゃ私のチヨコが毒みたいじゃない」

「その通りですよ」

ひっ酷い！

「おゝい

さつきからそこで何騒いでんだ？」

「「あっアキト（様）！」」

「アキト様、来てはなりません」

「アキト、これ作つたの！」

「ん？何、チヨコ？」

「そうよ！わざわざ作ってあげたんだから感謝しなさい！」  
やった！なんとか渡せたわ

「ああ、ハイハイー応貰うよ」

「早く食べなさい」  
早く早く

「はいはい」

「なっアキト様それを食べてはダメです！」

「えっ？」モグモグ

美味しいに決まってるけど

「ねえ、美味しい？」

「ん〜そうだ…なっ！ウツ（なんだ…コレ？）」

あっあれ？

「ど…どうしたの？」

「アツアキト様！？」

「いや、あれ？なんだこれ？毒？つかもつ限界？」

なあ！

「違うわよ、チョコレートです！」

「アキト様限界って!?!」

「取り敢えず

……>破壊力的な意味で<最高……だったぜ……?  
お前の……チョ……コ」

「アキト?」

あっあれ?

「だから……言ったのに……!」

そ、そんな!!

「ア……アキト……?」

アキト                      !!!!!!!」

） F i n ）



ユニーク1000記念『イリアのバレンタイン!』〈前編〉(後書き)

もし気が向いたら後半も修正しますww

ユニーク1000記念『イリアのバレンタイン!』〈後編〉(前書き)

駄文ですが読んでくだされば幸いです

ユニーク1000記念『イリアのバレンタイン!』〈後編〉

「ア……アキト……?」

アキト                      「!!!!!!」

・   ・   ・   ・

2日後

ん……朝……か

…………あれ?オレベットに入った記憶無いんだけど……

……ってそいやなんか凄いモノを食べた気が…………

アッ!

そつだよ!確か電波のチョコを食べたら急に体がおかしくなって倒れたんだ……!

あの電波……まさかオレを殺す気だったのか……?いや……電波の料理が殺人的に不味かったただけだな……うん

だからエレナさんもあんなに必死に止めてたんだな……納得納得

よし納得したところでちよつと電波と

オハナシしなきゃナ……?ハハハ……ハハハハハハ!

まあ嬉しかったけどね……?

・   ・

・

見つからない

電波は何処だ…

いつそのこと裏技使うか…？（七話で使います）

あつ！あそこにエレナさんいるじゃん

よし！先にエレナさんに聞いてみるか

「エレナさ〜ん！」

「アキト様！

もう大丈夫なんですか？」

「ん？ああ平気だよでもちよつと電波とオハナシがしたくてサ…ハハハ」

「そ…そうですか…」

「じゃ」失礼、イリア様なら中庭にいましたよ」

「そうなんですか

助かりました」

犯人は現場戻るってか…？

「では私は（だるい）仕事がありますので…失礼します」

今だるいって言ってた絶対に言ってた

「あつはいご苦労様です」

んじゃ

早速中庭に行きますかね

・

・

電波はいるかな？

おっい…たけど……なんで電波は雪ダルマ作ってんだ…？

「おい、アホ娘」

「え……？アキト？

起きたんだ！2日も寝たきりだったから心配したよ」

…コイツ全く反省してないな…？

てかオレ2日も寝てたのか…1日だと思ってた

…まあいい

「ハハハ…ちよつとオハナシしようカ」

「え？な…なに…かな？」

スウウウ

「あんな凶器人に食わせんじゃねえアホ電波！！！」

・  
・  
・

「だ…誰が電波よ！」

…アホではあるのか？

「お前だバカヤロウ！

なにしたら料理で人を2日も寝込ませられんだ！！」

「仕様がなないじゃない！チョコレート作りなんて初めてだったんだから！！」

「んなコト知るか！  
つかお前味見してないだろ？」

「……し……しましたあ」

おいおい

「コツチ見て言えコツチ見て」

「うう……」

な……なによお……良いじゃない  
一生懸命作ったのよ？……グスッ

アキトのためについて想って頑張ったのに……そこまで言わなくても……  
ズズッ」

泣かせちゃったよ……

……言い過ぎちゃったかな……？

「ああもう

悪かったよ

オレも言い過ぎた

ゴメンな……？」

「ううん……私こそゴメンネ？

美味しいの作れなくて」

「そんなときにすんな

正直言っ

スッゲ 嬉しかったよ『イリア』のチョコ

ありがとな」

「どーいたしまして………って……ア……アキト今私のコト

イリアって呼んでくれた…？」

あつやべっ！

「さあね電波ちゃんは電波ちゃんだろ？  
電波ちゃん」

「あつちよつと！

真面目に答えなさいよ…！！」

「やだねっ！」

「コラ…！！」

～fin～

ユニーク1000記念『イリアのバレンタイン!』 〔後編〕 (後書き)

続き…書かなきゃな



第七話 それって……多くね？（前書き）

帰ってきたよ！！

……多分

## 第七話 それって……多くな？

「おーい、大丈夫か？」

電波のやつ良い感じに翔んでいつよな

つかエレナさんも探すの手伝ってくれよ

「嫌ですよ

一人で探してください」

……ちよつ……なんで聞こえるんですか……エレナさん……

「はあい」

なんか一発で呼び出す方法はないのk……あつ！

「電波ちや〜〜ん！」

『電波じゃな〜〜い！！』

おお！マジで出てきたぞ！

凄いスピードでコツチ来てるし……

つかただけ吹っ翔んでんだよアイツ……翔ばしたのオレなんだ  
けどさ……うん……なんか……スミマセンでした……ホントに

「電波じゃないって言うてるでしょ！！」

はっ！？いつの間にか目の前にいるぞ！

冗談だろ？1キロはあつたはずだぞ！10秒とかで来れる距離じゃないぞ！

一体どうやったんだ？まさか熱血バトル漫画でよく出る瞬動か！？  
いや、電波がそんな凄い技を出来るとは思えん「ちよつと聞いている

の！」

「え？あつ悪い聞いてなかった」

メツチャ考え込んでたわスンマセン

「ちょ……！ちゃんと聞きなさいよ！」

「ゴメンゴメン、んで？何だっけ？」

「だ・か・ら！私は電波なんかじゃないって言ってるの！  
だいたいね！いきなり吹き飛ばすって一体なんのつもりよ……！」

あ、いや

「マジ……」

スンマセン

まさかあそこに電波がいると思ってなくて……」

あ……やべっさん付け忘れた……

「えっいや……あ、あの……」

何か私も言い過ぎたみたいで……その……ごめんなさい」

ん？さん付け処か電波って言ったのも分かってない……？

ラッキー

「まあ取り合えずこの話はここまでにしてさ

エレナさんの所に戻ろうぜ」

「そうね。行きましょうか」

よっしゃ！誤魔化せた……！

「エレナさーん  
見つけたぞ」

「ご苦労様です

それでは（面倒なので）いきなり本題に入りますが…  
実はさっきアキトさんに魔法を使用していただいた際に魔力量を測らせていただいたのですが……」

「？エレナどうしたの？  
何か問題でもあったの？」

問題？それは嫌だなあ  
何だか面倒くさそうだし……

「いえ、問題は無かったのですが、数値が桁外れすぎていて……」

「魔力量って数値で出るのか？」

「そうよ。基本的には  
一般人で“10”一般的な魔法使いで“50”王宮で働いている優秀な魔法使い、大体は神官って呼んでるんだけど、その神官で“150”って感じよ」

なんかロープレみたいだな  
MP的な

「因みに二人の魔力量は？」

「私は254でイリア様は317ですね

ついでに先ほどの説明の補足をさせていただくと…

魔力量というのは、基本的には生まれつきのものになります。  
一種の才能ですね」

へえそうなんだ

「鍛えたりして増やせないのか？」

「多少は可能ですがそれでも20上がれば良い方ですね」

ふーん

「で、一体アキトの魔力量はいくつだったの エレナ？」

「それが……1544です……」

「……え？」

「ですから、1544です。

神官10人分ですね

因みに前魔王は600前後だったと言われています」

マジかよ、魔力は抑えてたつもりなんだが……抑えてたのも測られたのか？

それでも多いが……

「まっまあいいわ

一応調べ終わってたんだし、国王様に報告しましょ  
これからのことも決めなきゃだしね」

え？

これからのことって何……？

第七話 それって……多くね？（後書き）

パソコンが壊れて意気消沈してたのを何とか持ち直して  
書き上げました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6846o/>

---

霸道を進みし勇者の世界救済

2011年8月23日07時04分発行